

摂南法学第 54・55 号抜刷

September 2018.

## ホッブズにおける存在

和田 泰一

## ホッブズにおける存在

和田 泰一

- 一 はじめに
- 二 ハイデガーにおけるホッブズ
- 三 ホッブズにおける存在
  - 1 名辞の分節
  - 2 繫辞による連結
  - 3 ものの指示
  - 4 論証の識別
- 四 おわりに

### 一 はじめに

本稿の目的は、ホッブズ (Thomas Hobbes) の論理学、なかでも繫辞 (copula) の「である (Is, Est)」の理論に対するハイデガーの存在論的批判を念頭に置きつつ、ホッブズの存在 (being, esse) の観念の意味内容とその諸問題を明らかにするとともに、唯名論や唯物論といった学問的諸領域に不分明のまま包摂されがちな彼の存在の観念を可能な限り整然と秩序化することである。

最初に、なぜホッブズの存在の観念をとりわけ取り上げて論じる必要があるのかを確認しておきたい。第一に、古代から継承されてきたアリストテレス・スコラ的な形而上学とホッブズの近代的な第一哲学との認識論的<sup>エピステモロジック</sup>な差異および転換を認識するためには、存在の観念の意味論的な転換を理解する必要があるからである<sup>1</sup>。もともとアリストテレスの『形而上学』は、スコラ

<sup>1</sup> 第一哲学 (Philosophia prima) の定義については、CDM 105; Lev 1076. ホッブズによれば、物体、偶有性、時間、場所、運動などもっとも普遍的な名辞の意味を正しく定義するこ

神学が提唱した抽象的本質 (Abstract Essences) や実体的形相 (Substantial Formes) の観念をホップズが激しく攻撃するさいにやり玉として挙げられる著作である (Lev 1076-1084, 1077-1085)。スコラ神学者たちは、自然科学の後に書かれた著作、もしくは自然科学の後に置かれた著作という意味にすぎない形而上学 (Metaphysiques) を、自然の領域を超越した超自然的な哲学の著作と読み間違え、外的な物体から分離しても存在し続けるような本質が何かしらこの世界に存在するとして、特定の実体に帰属しない抽象的本質や実体的形相に基づく虚偽の哲学を流布させてしまったのである<sup>2</sup>。

だがこうしたホップズの厳しい批判は、彼がアリストテレス以来の形而上学の伝統をすべて無視したことを意味するものではない。ホップズが述べたように、第一哲学 (first philosophy) という用語はアリストテレス以来の伝統的な形而上学を意味しており、もちろんその両者が主張した学問的な視座や方法、結論は必ずしもすべて合致することはないだろうが、表面上は同じ学問の領域に属すと考えられる。スプレイジェンスやザルカ、ライエンホルストが論じたように、ホップズは、アリストテレス・スコラ的な形而上学をただ非難しただけでなく、そこで用いられた用語やカテゴリー、類型論を継承しながら独自の第一哲学を構築したのだった (Spragens 1973; Zarka 1999; Leijenhorst 2002)<sup>3</sup>。それゆえホップズにとってアリストテレスの形而上学と

---

とが第一哲学の大きな目的であり、それらの名辞は、物体の本性と生成に関する人間の諸概念を説明するために必要なものである。

<sup>2</sup> ホップズによる抽象的本質ないし実体的形相の批判については、Paganini 2007。パガニーニの研究によれば、ホップズは、通常の一般的な語彙の用法から乖離したスコラ的な語彙の用法を批判するロレンツォ・ヴァッラの教説の影響を受けつつ、分離された本質の観念を批判している。ここで抽象的本質ないし実体的形相とは、分離された本質 (Separated Essences) とホップズが通常呼ぶものである。アリストテレスの実体や本質の観念を継承したスコラ神学者たちの分離された本質の教説によれば、魂は自然的な肉体である人間の实体から離れてもこの空間のどこかで活動しうるし、またパンの形相も、パンの形や色、味が存在しなくともこの空間のどこかで実在しうる。Lev 1082, 1083。

<sup>3</sup> 例えば、アリストテレスの形而上学とホップズの第一哲学との密接な関連性についてスプレイジェンスは、シュトラウス (Strauss) やブランド (Brandt) の著作を参照しつつ、アリストテレスの形而上学に対する敵視を表明したにもかかわらず、ホップズは、アリストテレスの著作や枠組み、概念に深く影響を受けながら自分の哲学体系を構築していったと述べる。クーン (Kuhn) が有名なパラダイム転換 (paradigm shift) の観念を用いて論じたように、ある時代・地域のさまざまな諸学問には、それらに基本的な諸概念やモデルを与えるある体系的な秩序モデル、すなわちパラダイムがその基底に存在しており、諸学問の歴史的発展・断絶にはパラダイム転換が必ず伴っている。ホップズは、アリストテレスの宇宙論的な秩序や枠組みを参照しつつそうしたパラダイム転換を試みたのだが、スプレイジェンスは、ホップズとアリストテレス両者のパラダイムの共通性と連続性——それは一方では自然科学的であり、また他方では形而上学的であろうが——を、次のように要約している。Spragens 1973, 46-47. すなわち、1. 世界の創造された秩序

は真っ向から拒絶されるべき空虚な学問ではなく、のちにホッブズが第一哲学の名において論じるところの、存在を一般的に論証するために必要な基本的諸概念の定義を彼に提供した学問である<sup>4</sup>。

ところで哲学は、どのような素材においてであれ、一般的な定理の、すなわちあらゆる普遍的なものの学問であり、そこで真理は、自然理性によって論証されうる。この第一の部分とその他のすべての基礎とは、存在者の属性一般の諸定理 (Theoremata de attributis entis in genere) が論証される学であり、第一哲学 (Philosophia prima) と呼ばれる。それゆえそこでは、存在者、本質、質料、形相、量、有限、無限、質、原因、結果、運動、空間、時間、場所、真空、単一性、数、その他のすべての諸観念について論じられる。それらについてアリストテレスは、一部は『自然学』の八つの論考の中で、また一部は、そこから現在第一哲学が形而上学と呼ばれるようになり、のちに言わば τῶν μετὰ τὰ φύσικὰ (『形而上学』) と名付けられた別の論考の中で論じている。(CDM 105)

存在者の属性を論証する学問というホッブズの第一哲学の記述は、存在としての存在を探求する学問というアリストテレスの『形而上学』での記述に影響を受けて書かれたものであろう。というのも、アリストテレスによれ

---

は、自然 (nature) という用語によって示されうること、2. 自然は統一された全体であり、全体に作用する同一の根本的な諸原理を持つこと、3. 人間自身は自然の一部であるが、合理的で最も優れた自然の作品であること、4. 自然の構成要素は、(a) 変化、あるいは運動、(b) 実体、あるいは変化を通して一定不変のもの、(c) 偶有性、あるいは実体の消滅しうる属性であること、5. 方法論的に人は、最も単純な諸要素、基本的諸条件、第一の諸原理を観察することで自然を理解しなければならないこと、6. これらの第一の諸原理のうち運動の本性は特に重要であり、それは自然が理解される前に理解されなければならないこと。とくに最後の運動の本性の理解とは、スプレイジェンスによれば、ガリレオら近代物理学者たちが新たに提唱した慣性の法則を示唆している。慣性の法則に従って作用する無限の運動の観念こそがアリストテレスの有限な宇宙観からのパラダイム転換を可能にさせたのであり、それは、最高善を目指さずに自分の善を無限に追究し続ける人間像だけでなく、自然権と死の恐怖に基づいて人為的に構築された国家観をも基礎づけている。

<sup>4</sup> ライエンホルストは、ホッブズの第一哲学と後期アリストテレス主義の形而上学との共通性を、1. 主題、2. 他の学問に対する位置づけ、3. 方法という三つの観点から端的に指摘している。すなわち、第一にホッブズの第一哲学は、自然的な物体と我々へのその表象を学問的対象とする点で人間の自然理性の範囲内にとどまる。第二に、ホッブズは第一哲学と一般自然学 (physica generalis) との区分を廃止したので、自然的物体を扱う学問として諸学問の体系の基底に位置づけられる。第三に、ホッブズは第一哲学の出発点として用語の正しい定義を提唱し、トマス主義者が用いたような無意味な言葉を排除する。Leijenhorst 2002, 17-18.

ば、個別的・固有的に存在する云々の事物的存在者を研究するのではなく、それら存在者の諸原理や原因を追究すべく、それ自体で存在する存在、ないし存在としての存在をその研究対象とする学問が形而上学だからである (Aristotle 1957, 1003a21-32, 1025b3-4)。それゆえホッブズの存在の観念の意味内容とその意義を分析することは、「存在とは何か」という問題に関していかなる程度までホッブズがアリストテレスの形而上学を継承し、またいかなる点でそれから乖離したのかを理解し、ホッブズの第一哲学の近代性とその認識論的な差異および転換を明らかにするためにも、意義のある予備的作業となるであろう<sup>5</sup>。

存在の観念を扱うべき第二の理由として挙げられるのは、ホッブズが展開した存在の観念を概念的に整理することによって、論理学における諸名辞と繫辞の基本的結合に基づく論証的諸関係だけでなく、自然学における外的な物体の偶有性と人間の感覚との表象的諸関係も明らかにされる点である。すなわち、心の言説と言葉の言説それぞれの形式的構造と内的諸項間の諸関係、そしてそれら二つの言説の透明な重なり合いと連鎖で表現される、古典主義時代の表象一言説の表的タフローで象徴的な秩序の解明である<sup>6</sup>。何よりもまず、ホッブズにとって存在とは、主語と述語を連結する媒介的な動詞である繫辞の「である (Is, Est)」で表現される単純な論理学的記号であったことを想起すべきであろう。古典主義時代においてこの繫辞の「である」としての存在の観念は、フーコーが次のように明確に述べたように、命題における主語と述語の正しい連結に基づいた真の論証を言語内部において可能にするだけでなく、外的な物体が引き起こした運動が感覚的表象として人間に知覚され、またその表

<sup>5</sup> ホッブズの第一哲学と後期アリストテレス主義の形而上学との関連性とその意義については、Leijenhorst 2002, 17-55。ホッブズの第一哲学と彼の自然学との関係性について述べるならば、ホッブズは、アリストテレス主義の形而上学に加えて、その一般自然学の影響を強く受けている。もともと後期アリストテレス主義においては、存在の普遍的な学問である第一哲学と一般的な物体の普遍的な学問である一般自然学は分割されていたのだが、第一哲学と一般自然学とを、そして存在と自然的物体とを同一視してアリストテレス主義の機械論化を推し進めたというのが、ホッブズの第一哲学に対するライエンホルストの解釈の重要な要点の一つである。「重要なのは、第一哲学の領域の中に自然学を分類するということが、後期アリストテレス主義の中では妥当性のある選択肢であったということである。それにもかかわらず、ホッブズはその先に歩を進めるのである。彼は、一般自然学が第一哲学に属すると述べるだけでなく、第一哲学は一般自然学に他ならないと主張している。ホッブズの観点では、存在と物体は同一視できる概念なので、存在一般の学問と物体一般の学問との間にはいかなる差異もないのである。」(Leijenhorst 2002, 36)

<sup>6</sup> 心の言説と言葉の言説という二つの語句は、『法の原理』の記述に基づく。EL 31-39。また古典主義時代の諸学問における表象の構造を分析したものとして、Foucault 1966。

象が言語によって再一表象されるという二重の表象的意味作用の連鎖をも可能にしつつ、人間の思考を言語の外部へと超越させていくという特権的な地位を持っている。

存在 (l'être) を指示するやり方がなければ、言語はない。だが言語がなければ、言語の一部でしかない動詞「である (être)」もない。この単純な語は、言語の中で表象される存在 (l'être) である。だがそれ (動詞「である」) はまた言語の表象的存在でもあり、それが語るものを肯定することを言語に可能にしつつ、言語に真偽を可能にするものなのである。この点でそれ (動詞「である」) は、他のすべての記号とは異なっている。というのも、動詞「である」以外の他のすべての記号は、それらが指示するものと一致し、正確で、合致しうる、あるいはそうなりえないことはあっても、真でも偽でもないからである。言語は、意味されるものの存在に向かって記号の体系を飛び越えていく語のその特異な力によって、何から何まで徹底的に言説 (discours) となる。……その結果、動詞「である (être)」は、それが示す表象にどんな言語をも関係づけるという機能を本質的に持つことになるだろう。(Foucault 1966, 109-110)

こうしたホップズの繫辞の特権的な地位や特異性に注目し、その存在論的な限界を露呈させるという消極的な仕方ではあっても、存在者の存在の探求という特有の問題意識のもと現象学的方法を用いてそれを最も鋭敏かつ大胆に考察したのが、ハイデガーであった。ハイデガーがホップズの論理学について言及した文脈とは、1927年の夏学期にマールブルク大学で行った講義『現象学の根本問題』において展開された、単なる存在者ではなく存在者の存在の探求へと人々の視点を連れ戻すべきとする現象学的還元から、現象学的構成および解体へと至る現象学的存在論の議論においてである (Heidegger 1975, 260-273)。その議論の過程でハイデガーは、現象学的解体を実践するために哲学的存在論の歴史的伝統へと立ち戻り、そこで扱われるべき根本問題を、存在論的差異の問題、存在の根本的分節の問題、存在の変容可能性および多様性の統一の問題、存在の真理性格の問題、という四つの諸問題に分類して提示するが、このうち第四の問題がホップズの論理学の繫辞の理論に関係してくる (Heidegger 1975, 32-33)。そこで検証されている問題とは、この外的世界に現前する存在者の存在様態は多様であるにもかかわ

らず、なぜ繫辞の「である」によって存在一般が真理として語られうるのか、という問題である。カント的な表現を使って言い換えると、この世界に存在する幾多の存在者は、それが人間の感性によって受容されるべき直観的基体であるという感性的な意味でも、またそれが人間の悟性によって諸カテゴリーの体系の中に包括されるべき総合的述語であるという論理的な意味でもさまざまに異なるにもかかわらず、なぜ論理学において「である」という繫辞が、存在一般を明示する真理の普遍的表徴として語られうるのか、という問題である<sup>7</sup>。そうしたハイデガーの問題設定においてホップズの繫辞の「である」は、「何であるか」つまり本質 (essentia) の地平で語られており、それに加えて真理そのものさえも意味しているとハイデガーは断言するのだが、もし彼の解釈に妥当性があるとするならば、次のような諸問題が不可避免的に生じることになる。すなわち、第一に、繫辞の「である」によってその理由の考察へと我々が促されるところのある特定の名辞が、いかに他の諸名辞から区分され、またその意味内容に応じて正確な定義の形式で説明されうるのかといった名辞の分節に関わる問題。第二に、繫辞の「である」が、いかに分節化された諸名辞を主語と述語として結合しうるのかといった命題に関わる問題。第三に、繫辞の「である」がいかに原初の命名行為において命名する名辞と命名される外的なものとの真の一致を保証しうるのかといった指示に関わる問題。第四に、繫辞の「である」は、いかに明証性のある真の命題から出発して、偽りの意見や誤った意見を排除しつつ、推論による三段論法を経由して確実性のある普遍的な結論を最終的に構築しうるのかといった科学的論証に関わる問題。第一哲学や論理学、自然学など多岐の諸学問に関与

<sup>7</sup> この論理的な問題は、周知のように、カントによって一般論理学の問題、すなわち先験的分析論と先験的弁証論の問題として提起されることになろう。人間の精神の能力には、表象を受容する能力である直観と、表象を経て対象を認識する能力である悟性がある。一般論理学の基本的な役割は、経験の対象が何であれ、悟性によって対象一般を思惟するための先験的規則を与えることにあり、それが、先験的分析論としてカントが論じた部分なのである。したがって思惟一般の形式だけを論じる一般論理学の部分、すなわち先験的論理学は、「真理とは何であるか」という問題に誠実に答えることはしない。というのも、カントによれば、伝統的な論理学は「真理とは認識とその対象との一致である」という対応説的な答えでその問題に答えようとしたが、先験的論理学は認識と論理的形式との一致を論じることはしても、認識と諸々の経験の対象との一致は論じないからである。そのように人々に誤った仕方でも考察された一般論理学こそがオルガノン (Organon) として誤認された仮象の論理学であり、悟性および理性の対象に対する濫用や越境を批判する先験的弁証論が扱う部分なのである。ではホップズはカントが批判したところの仮象の論理学を回避しえたのかといった問題こそ、ホップズの論理学の存在のテーゼに対するハイデガーの批判の焦点であり、また本稿の隠れた主題でもある。Kant 1974, III, 97-106.

するこれらの諸問題をホッブズ自身の哲学的見解に基づいて判明に断定しないとしたり、ホッブズの哲学体系における存在の概念の位置づけは不十分で混乱したままに終わってしまうだろう。とくに繫辞の「である」をめぐる論理的な分析は、心の言説や言葉の言説、命名行為などの諸位相において、ホッブズの自然学の物体—偶有性の分析と多くの部分で深い関係性を持つがゆえに、一方ではハイデガーによって、ホッブズの論理学は外的なもの(res)に最終的に依拠せざるをえない破綻した唯名論であると論じられたし、他方ではハイデガーを批判するパートマンによって、逆に人間の言語が外的なものとの認識のさまざまな諸契機において直接関係するからこそ、構成主義的かつ人為的に幾何学的論証や政治機構が構成されうるという理由から、知覚の心理学や科学的構成主義、プロタゴラス的な人文主義と彼が呼ぶところのホッブズ哲学の諸特徴が擁護されたのであった(Bertman 1988; 1989)。つまりホッブズの繫辞の「である」の観念、すなわち存在の観念を明晰に理解するためには、単に論理学の形式的構造や内的諸項間の関係だけでなく、自然学の知覚理論において論証されるような心の言説の表象的諸関係まで考慮に入れる必要がでてくるのである。

こうした問題意識に基づきつつ、本稿では、まずハイデガーが展開したホッブズの繫辞の「である」の批判とその文脈について論じることで、ホッブズの繫辞の論理的な意味内容を明らかにする。そのうえでパートマンのハイデガー批判を主に参照しつつ、ホッブズの第一哲学や論理学、自然学で論じられた存在の観念のより正確で統一的な意味内容を提示するとともに、その根源的意義について論証することにしたい。

## 二 ハイデガーにおけるホッブズ

1927年の夏学期に行われたハイデガーの講義『現象学の根本問題』の主題は、具体的な現象学的問いを概観したのち、現象学の根本問題の体系的連関とその基礎づけ、さらにそれらの学問的な取り扱い方と現象学の理念を論じることであった(Heidegger 1975, 2)。ハイデガーにとって哲学とは何よりもまず存在についての学であり、哲学の方法論的な一様式である現象学とは、存在者の存在を追究するために我々現存在が従わなければならない学問的な方法である。現象(Phänomen)とは、素朴で通俗的な視点から眺めると隠れ

たままに留まり、経験的直観の対象と同等な存在者の存在様態として自らをゆがめられた仕方で世界に顕現せざるをえない存在そのものを、また現象学とは、その存在の事態そのものへと向かう仕方でそれを追究するという存在論の学問の様式を意味している (Heidegger 1977, 46)。そこで現象学の様式は、存在そのものへと現存在の視点を連れ戻す現象学的還元、存在そのものへと現存在が積極的かつ自由に企投していく現象学的構成、伝統的な存在論の歴史に立ち返り、その各々の問題設定や地平、観点を批判的に再構築する現象学的解体という三つの根本要素から成る (Heidegger 1975, 26-32)。

ハイデガーによってホップズの繫辞の「である」が検証されるのは、この現象学的解体の一環として、存在論の四つの伝統的テーゼの各々が包含する諸問題を彼が現象学的に批判する箇所である。存在論の四つの伝統的テーゼとは、次のようなものである (Heidegger 1975, 55-320)。すなわち、第一に、存在者と存在を区別する存在論的差異の問題の現れとしてのカントのテーゼ、「存在はレアルな述語ではない」の問題。第二に、本質存在 (essentia) と事実存在 (existentia) とを区別する存在の根本的分節の問題の現れとしての、アリストテレスまで遡る中世の存在論のテーゼ、「存在者の存在には、「何であるか」という本質存在と「目の前にあること」という事実存在が属す」の問題。第三に、存在の変容可能性および存在の多様性の統一の問題の現れとしての近代存在論のテーゼ、「存在の根本様態は、自然の存在すなわち延長するもの (res extensa) と精神の存在すなわち思惟するもの (res cogitans) である」の問題。そして第四に、存在の真理性格の問題の現れとしての論理学のテーゼ、「すべての存在者は、そのつどの存在様態に関わりなく、「である (ist)」によって語られ、議論されうる」の問題。第一のテーゼは存在論的差異を問題として扱っており、存在とは絶対的に定立された主語であるがゆえに、ものに付随し、その形状や性質を表す事象性 (Realität) としての述語にはならず、したがって存在として絶対的に定立される事実存在とレアルに説明される存在者は区別されなければならないというカントのテーゼが批判的に論じられている。また第二のテーゼは存在の根本的分節を問題として扱っており、存在者と存在の間の存在論的差異ではなく、存在の中で本質存在と事実存在の間の区別があったことが、スアレス、トマス、スコトゥスらの存在論を参照しながら論証されている。第三のテーゼは、多様な存在様態の統一の仕方を問題として扱っており、統覚を総合的に統一する思惟するものとしての自己意識を人格性 (personalitas) に見出したカントの人間性

(Menschheit)の観念が批判的に分析されている。

これらのテーゼの各々の妥当性を哲学史の観点から存在論的に検証することは本稿の主題ではないので割愛するが、ではホップズの存在の観念に対する我々の解釈に深く関与する第四のテーゼは、ハイデガーにおいていかなる問題意識とコンテキストのもとで論じられているのだろうか。ハイデガーによれば、多様な固有の存在者ではなく存在一般を規定するという大きな哲学的使命は、古代存在論から現代にいたる長い歴史の過程で論理学の繫辞(copula)の中に押し込められてしまい、ヘーゲルやフッサールの業績をもってしてもその狭い学問的領域から脱することは叶わなかった。だがパルメニデスやアリストテレスの記述から理解できるように、論理学の学問的対象である繫辞は命題に必要な不可欠な基本的構成要素であるし、また命題は真理と関係するがゆえに、真理と存在との結びつきの考察は、存在一般を探求するためには哲学的に避けて通れない試金石である<sup>8</sup> (Heidegger 1977, 282-290)。それゆえ繫辞としての「である」が存在論の根本問題といかに関連しているかを明確にするために、ハイデガーは、アリストテレス、ホップズ、J・S・ミル、H・ロツツェの繫辞の諸理論を引きあいに出す。ではホップズ以外の三人の繫辞の理論とはいかなるものであったのだろうか。

言明(Aussage)ないし命題(Satz)の基本的構造である主語—繫辞—述語という諸名辞の結合関係は、アリストテレスの『命題論』で端的に語られている(Aristotle 1966)。動詞はある状態に加えて付加的に結合を付け加えるものであるが、「である」という動詞はそれ単独では記号として役割を果たすことはなく、その表示対象が実際にあるのか、それともないのかを表す記号ではない。つまり、「である」という動詞は、外的なものとして存在する各々の存在者の状態を表示するのではなく、主観の中に存在するような存在者の

<sup>8</sup>『存在と時間』の中でハイデガーは、「真理と存在は同一のものである」(τὸ γὰρ αὐτὸ νοεῖν ἐστὶν τε καὶ εἶναι)というパルメニデスの言葉を引用しつつ、古代哲学における真理の真理性(Wahrheit)と存在との根源的連関を主張する。すなわち、1.真理の「ありか」は、言明(判断)である、2.真理の本質は、判断とその対象との「合致」にある、3.論理学の父であるアリストテレスは、真理をその根源的な場所としての判断に帰し、また「合致」としての真理の定義を開始した。つまり伝統的な真理の考え方では人間の認識が対象と一致することが真理であり、そこでは判断している人間の内的な意味内容と判断されている外的な実在の事物との間には克服しがたい断絶が横たわっている。そうした伝統的な真理の姿勢に対してハイデガーは、発見としての真理を対置する。つまり、我々が真理として定立する言明とは、現存在が志向しているところの存在者がそれ自体でありのままに現れて発見されるものであって、また現存在は、世界内存在の関心の構造すなわち開示態の中でつねに真理の内に入り、それを前提にして初めて言明を定立することができる。Heidegger 1977, 282-305.

存在を意味するのである。アリストテレスにとって存在者の存在を意味する「である」とは主観の中に存在する何ものかであり、真理を理解した場合にのみそれを把握する展望も開けてくることになる。つまり、アリストテレスの命題の分析において繫辞とは本来、1. 存在者の存在、2. 結合、3. 真理という三つの意味を暗に含んでいるのである。またJ・S・ミルは『演繹論理学と帰納論理学の体系——証明理論の諸原理と学問的研究の方法の叙述』で、繫辞の「である」とは主語と述語を連結し、述語が主語について肯定ないし否定している述定の記号であるだけでなく、言明された対象が現実に事実存在していることを示す記号でもあると述べる。例えば「Pがある」、「Pが実存する」という命題によって表現されるように、外的なものが我々の目の前に存在していることを端的に示す命題も存在するので、繫辞は、主語と述語を連結する記号であると同時に存在者が現実に実在するものを明示する記号でもあるという両義性を含有していると考えたミルは、諸命題を本質的命題と偶然的命題に区別することでその両義性を克服しようとしたのである。H・ロツツェは『小論理学』の中で、繫辞には「Pではない」という否定判断はないとして、すべての判断は二重判断であると結論づける。すなわち、「SはPである」、「SはPでない」という命題はそれぞれ「SはPである、これは真理である」、「SはPである、これは偽である」というように、肯定判断に真偽についての判断が付加されたものなのである。こうしたロツツェの二重判断の理論は、対象である存在者に対して真偽の判断が付加されることを意味しており、それゆえロツツェにおいて存在者の存在とは、主観によって存在者に真の判断が下されているという存在者の対象性に等しいことになる。

ではそれら三人とはまた違った特徴を持つホッブズの繫辞の理論についてハイデガーはいかなる評価を下したのか、その存在論的な批判を検証することにしよう。ハイデガーの基本的な主張は、ホッブズの繫辞の「である」は、本質存在 (essentia) の地平で問題とされている、というものである。まずハイデガーはホッブズの言明 (Aussage) ないし命題 (propositio) の定義を紹介し、それが心の働きを代示する記号であって、主語と述語を形成する二つの名辞が繫辞の「である」によって結合されていることを指摘する<sup>9</sup>。言明ないし

<sup>9</sup> ハイデガーは真理と存在との諸関係を分析するさいに言明と訳される Aussage という語を用いるが、これはホッブズの論理学では命題 (proposition, propositio) を意味しており、本来ならば命題と翻訳するのが望ましいかもしれない。本稿では、日本でのハイデガーの著作の翻訳の仕方に従い言明と訳しておくが、「SはPである」という命題のことを意味することに注意してほしい。

命題は、第一に主語が述語に等しいこと、第二に主語の内容が述語の内容に含まれていること、という二つの条件のいずれかを満たした場合にのみ、真理や真の命題として認められる。ここで重要なのは、真の言明ないし真の命題の中で繫辞の「である」によって連結された二つの名辞は、それら二つの名辞が同一の事物に対して付与されたことを意味しており、またそれらの名辞がその事物に付与された理由 (causa) さえも我々に思考させるという点である。

「そして確かに名辞（すなわち連結された名辞）は、心の中で一つの同じものへの思惟を引き起こす。」二つの名辞、主語と述語は、一つの同じ事柄に関する思考を引き起こす。「しかし連結は、それらの名辞がそのものに付与される理由についての思惟を引き起こす。」しかし連結それ自体、むしろその記号である繫辞は、なぜ二つの連続する名辞が一つの同じ事柄に付け加えられるのか、という根拠がそこで考えられるような思惟を引き起こす。繫辞は、単に結合の記号、結合概念ではなく、結合性がそこに基礎づけられているところのもの、つまり理由 (causa) の公示である。(Heidegger 1975, 263-264)

ではホップズの論理学において主語と述語という二つの名辞がある特定の事物に付与される時、その命名の理由とは何であるとハイデガーは解釈したのだろうか。例えば、「物体は可動的である (corpus est mobile)」という命題において「物体 (corpus)」と「可動的 (mobile)」という二つの名辞は、外的な同一の存在者を特定して指示すると思われる。しかし我々の思考はその先へと進み、「物体」とは何であるのか、「可動的」とは何であるのか、さらには「物体」、「可動的」と呼ばれるものが、他の名辞で呼ばれない理由とは何であるのか、という命名の原因に対する問いの沈思へと赴いていくのである。ハイデガーによれば、そのとき繫辞が我々に思考させる命名の原因とは、「ものの何であるかということ」、すなわちもの (res) の本質 (essentia)、ないし何性 (quidditas) を意味している。本質ないし何性の考察を我々に喚起するというそうした繫辞の性質から、ホップズの具体名辞 (nomina concreta) と抽象名辞 (nomina abstracta) の区別も派生することになる。ホップズによれば、具体名辞とは、例えば「物体」、「可動的」のように我々の目の前に事実存在するとして基底に置かれたもの、すなわち基体 (suppositum,

ὄλοκείμενον) に付与された名辞であり、また抽象名辞とは、例えば「物体的であること」(esse corpus) ないし「物体性 (corporeitas)」、 「可動的であること (esse mobile)」 ないし「可動性」(mobilitas) のように、具体名辞にそうした名辞が付与された根拠を示すべく、具体名辞の本質や何性、偶有性を表示する名辞である (DCo 31-33; 28-29)。他の名辞から区別されるべく具体名辞の名称とその意味内容を決定づける抽象名辞は、名辞がものに付与される理由の考察へと我々を導く繫辞の「である」から生じてくるとホッブズは明言しており、言わば結果的に、具体名辞や抽象名辞を含めたすべての名辞の存在根拠とは、ものの本質ないし何性へと我々を立ち返らせる繫辞の「である」に存すると考えてよいであろう。

だがハイデガーがホッブズの論理学を唯名論の限界として位置づけるのは、繫辞が真偽の問題と関係するときである。主語が述語に等しいとき、あるいは主語の内容が述語の内容に含まれるときに、繫辞によって連結された命題は真理や真の命題と呼ばれるが、そうした繫辞による正しい連結の条件が成立するのは、その二つの名辞が一つの同じものを指示している場合だけであり、それらがまったく別のものを指示している場合、命題は偽になってしまう。だがここでホッブズの真理とは、繫辞によって連結された主語と述語が一つの同じものを指示することであると単純に述べることは、彼自身の真理の構造に鑑みると、厳密には正しい表現とは言えないかもしれない。というのも、ホッブズ自身は自らの唯名論的な観点を一切捨てることなく、真偽は言葉 (oratio) の中にあるのであり、もの (res) の中にあるのではないと説明するからである (DCo 36; 32)。あくまでホッブズにとって真偽の決定要因とは、主語が述語に等しいこと、あるいは主語の内容が述語の内容に含まれることという、繫辞に基づく諸名辞の正しい連結の有無であり、それら諸名辞が表示するであろう同一の外的なものと同様に関わりを持たないという意味において、彼は徹頭徹尾唯名論的な真偽の判断基準を提示している。そうした唯名論的な言説の秩序の中で繫辞の「である」によって諸名辞を正しく連結し真の命題を構成することは、他の動物から人間を分け隔てる人間固有の能力でもある。例えば、動物が制作された人間の鏡像を見てそれを恐れたり、じゃれたりしたとしても、動物はそれを真理だとか虚偽だとか考えることはなく類似によって人間だと判断したのであり、ただ人間だけが、言明ないし命題の地平において真偽の判断ができるからである (DCo 36; 32)。

しかしこうしたホッブズの唯名論的な言説の秩序は、言語の秩序に純粹に

基礎づけられ、またその内部でのみ貫徹されうるのはなく、原初的な命名行為による言葉ともとの結びつきを露呈してしまうとハイデガーは述べる。ハイデガーによれば、次のホップズの記述が示すように、ホップズの唯名論的な真理は繫辞による諸名辞の連結に純粹に基づくのではなく、ものへの名辞の付与が適切に行われ、言葉を使う人々に真理として受容されているかといった言語外の習慣的な事実に基づくように見えてしまうのである(Heidegger 1977, 271-272)。「ここからまた演繹されうるのは、最初の真理は、ものに名辞を最初に付与した人々、あるいは他の人が付与したものを受け取った人々によって恣意的に作られたということである。というのも、(例えば)「人間は生きる被造物である」ということが真であるのは、これら二つの名辞を同じものに付与するということが人々に気に入られたという理由からなのである。」(DCo 32; 36) それゆえ真理の理由を示すと思われたホップズの繫辞の「である」、つまりホップズの論理学における存在の観念は、ハイデガーの見解によれば、彼の唯名論が予め排除したと思われるものの領域、つまり存在者の領域に足を踏み入れてしまっており、存在と真理の諸関係の総体を一つの哲学的体系として統一的に考察することに失敗しているのである。換言すれば、ホップズの唯名論は、一方ではものの領域を排除し、繫辞の「である」による名辞の連結によって真理や真の命題を構築しようとするのだが、他方ではものに対する名辞の付与という原初的な指示の契機においてももの領域に足を踏み入れざるをえないという首尾一貫性を欠いた体系しか我々に提示できていないのである。

こうしてホップズを含めた四人の伝統的な繫辞のテーゼの不完全な論証を確認した後で、ハイデガーは、世界内存在という現存在の基本構造に依拠しつつ、言明ないし命題における真理の性格を現象学的・存在論的に論証していく。現存在が言明ないし命題において繫辞の「である」を用いて真理を定立するとき、言明すること一言明されるものという世界内の意味連関のなかで現存在の志向的態度が予め前提とされており、そうした現存在の志向的活動のなかで隠された真理が露呈され、また発見、開示されると述べる。だが開示態、被投性、投企といった現存在の存在構成と真理との諸関係の総体が、ハイデガーにおいて存在論的にいかなる様相を呈しているかを論じるのは、本稿の主題をはるかに超えた主題であろう<sup>10</sup>。ともかくハイデガーによ

<sup>10</sup> ホップズとハイデガー両者の真理の観念に関して、補足しておこう。

まずハイデガーは、繫辞の「である」による諸名辞の正しい連結というホップズの唯

るホッブズの繫辞の理論の批判として確認しておくべき要点は、次の三つの

名論的な真理の観念に対して疑念を呈する。なぜなら、もし真理が諸名辞の正しい連結に存するのだとしたら、名辞は人間の心の言説を転移、翻訳したものであるので、諸名辞の連結は、それらの名辞が表象するところの感覚的表象の連続と透明な仕方に対応していなければならないからである。つまり、言葉の言説と心の言説との透明な対応関係が予め規定されていなければならないからであり、さらに同様に、心の言説とそれを人間に知覚させたところのもの自体との対応関係も予め規定されていなければならないからである。当然ホッブズは、物体—感覚的表象—論証という二段階に設定された透明で二重化された表象関係を主張する。私の見解によれば、ホッブズは、普遍的な原因かつ第一原理である運動の観念に、そうした諸々の真理関係の総体を一元的かつアプリオリに基礎づけているように思われる。しかしホッブズ自身も述べているように、基本的に自然学は外的物体からの運動の知覚によって開始されるアポステリオリな学問であること、また知識自体が条件的な性格を持つことに鑑みれば、運動の観念自体もアプリオリにのみカテゴリー化される観念であるのかどうか、その判定は難しい。ホッブズの運動の観念が不分明な位相にとどまっているのは、ホッブズ自身も述べたように、運動の観念自体が、普遍的な原因や第一原理として幾何学的に考察されるアプリオリな側面と、物体の偶有性のすべての変化の原因として自然学的に考察されるアポステリオリな側面を持っているという両義性に起因するからであろう。DH 93-94.

だが仮にホッブズの運動の観念が、繫辞の「である」の形式に転移されつつ命名の理由を我々に考察させるアプリオリな根拠として、すなわち諸学問の真理を基礎づけるアプリオリな根拠として、ホッブズの哲学体系の中で存在者の存在を表象性として定立しているのとするならば、ハイデガーにとって繫辞の「である」は、言明ないし命題の成立に先立って、すでにこの世界内にある我々現存在の中でその意味がアプリオリに規定されている観念となる。繫辞の「である」によって言明ないし命題が成立した後に真理が露呈し、存在者の存在が了解されるのではなく、その逆に、すでに繫辞の「である」の中で真理は露呈されており、また現存在は本質存在や事実存在として存在者の存在を了解している。真理には、隠れたものが露わになるという意味での露呈すること、そして露呈において何かが真理として露呈されている状態が含まれるのだが、それは、真理を予め了解している現存在という存在様態のもとで可能になるのである。Heidegger 1975, 304-311.

『存在と時間』によれば、「現存在は真理の内にある (Dasein ist in der Wahrheit)。(Heidegger 1977, 292) ある世界に属する世界内存在として生きる現存在は、ここやあそこという場所や、未来と過去という時間に自らの存在可能性を開いていく開示態 (Erschlossenheit) において存在し、「…に関わらせられる」という関心 (Sorge) という存在様態としてある。関心という現存在の開示態は、被投性 (Geworfenheit)、投企 (Entwurf)、頽落 (Verfallen) という三つの側面を持っている。被投性は、自分の由来と帰趨が暗闇に包まれたまま不安を感じながらこの世界内に生きねばならないという現存在の既成事実性を意味している。投企は、「…のために生きる」というように世界内で生きる主旨や有意義性を了解した上で、自らの存在可能性に向けて自分を投げ出そうとする現存在の実存論的態度を意味している。頽落は、世界内存在にあって世間一般の生き方に埋没してしまい、自己の存在可能性に向けて了解も投企もなくなってしまった現存在の疎外的状況を意味している。

ハイデガーにとって真理とは、こうした開示態の諸様相において隠された非本来的な現存在の存在様態から開かれた本来的な現存在の存在様態が露わになることとして表現される。すなわち現存在にとって真理とは、真理と非真理性が入り混じる世界に被投され、世間に頽落して主旨や意義を見失った非本来的な状態から、実存論的了解や投企を意識した本来的な状態へと現存在の意識や姿勢を転換することなのである。要約すれば、ハイデガーは、真理性の現象の実存論的・存在論的解釈として、真理の真理性とは現存在の開示態であること、現存在は真理性と非真理性の内にあること、という二点を挙げている。Heidegger 1977, 290-305.

テーゼにまとめることができる。すなわち、1. ホッブズの論理学において存在は繫辞の「である」であり、言明ないし命題において主語と述語の真の連結を保証する根本要素であること、2. 繫辞は、ものに名辞が付与された理由 (causa)、すなわち本質存在 (essentia) についての思考へと我々を導くこと、3. ホッブズの真理の概念は諸名辞の連結の枠内に収斂されず、ものに対する原初的な命名行為という指示が必要であること（それゆえ結果的にホッブズの唯名論的な存在の観念は破綻していること）。

### 三 ホッブズにおける存在

ではホッブズの使用の観念に対するハイデガーの解釈は、存在論的（ないし形而上学的）および論理的に、いかなる程度まで妥当性を主張しうるのだろうか。その最も議論の余地がある部分は、繫辞の「である」を基軸とするホッブズの唯名論の体系がその内的構造だけでは一貫性を持ちえないとした、前記のハイデガーの三番目のテーゼであろう。

このハイデガーの見解に対して最も鋭い批判を展開したのが、バートマンの論考であった (Bertman 1989)。バートマンは、ホッブズをプラトンに対立するソフィストの立場、とくに人間を真理と善の尺度であると規定するプロタゴラスの人文主義の系統に位置づけつつ、ホッブズの哲学体系は知覚の心理学 (psychology of perception) や科学的構成主義 (scientific constructivism)、唯名論 (nominalism) といったいくつかの主要な諸観点が相互に複雑に組み合わせられることで構築されているとして、彼のソフィストの特徴を擁護しようとする (Bertman 1989, 108)。とりわけバートマンは、哲学はものの属性についての計算ないし推論によって遂行される学問であることから、ホッブズの哲学は外的なものから乖離した空虚な言語上の学問ではなく、我々の外部のものの確実な知識となりうると、ハイデガーに対して反論する。バートマンは、ホッブズの「唯名論は経験主義的な唯物論から生じ、それに寄与する」 (Bertman 1989, 109) のであり、ハイデガーは論理学について論じた『物体論』第一部のみに着目して自然学について論じた第四部を無視してしまっただけゆえに、理性による諸名辞の連結が感覚的経験から生じることに配慮しなかったのだと述べる。すでに『法の原理』を執筆したころからホッブズは、人間の認識能力を言葉を介さない心の中の感覚的表象

の連続である「心の言説 (discourse of the mind)」と諸名辞の連結である「言葉の言説 (discourse of the tongue)」とに区分し、後者は前者の過去の記憶を心に喚起する記号であると論じていたが、バートマンは、彼が知覚の心理学と呼ぶところの心の言説の領域をハイデガーは顧みなかったと指摘する (EL 13-24)。その根拠としてバートマンは、次のホップズの記述を引用し、ハイデガーが言葉の言説だけに着目したのは不適切であり、人間と動物双方の心の中に共通して存在するような、感覚的経験から生じる計算や推論も考慮に入れなければならないと述べるのである。「我々に身近なすべての現象ないし現れのうち、最も驚くべきなのは、現出そのもの、*τὸ φαίνεσθαι* である。つまり、ある自然的物体がそれ自身にほとんどすべてのものについての模像を持つのにに対し、他の物体はまったく持たないということである。それゆえ現れが、それによって我々がすべての他の物事を知る諸原理であるとしたら、我々は、感覚こそが、それによって我々がこれらの諸原理を知るところの原理であること、そして我々が持つすべての知識は感覚に由来することを認めなければならない。」(DCo 389; 316-317; Bertman 1989, 109)

バートマンによれば、知覚の心理学というホップズの認識論的側面は、事実存在 (existence) と呼ばれる外的な物体とその運動に基づく彼の唯物論と密接に関連している。というのも、「それら (普遍的なもの) すべては一つの普遍的な原因しかない、それは運動である」(DCo 69; 62; Bertman 1989, 115) というホップズの根本原理から理解できるように、人間が物体の運動として知覚する感覚的経験はもはや普遍的な原理、科学的知識の第一原理だからである。それゆえ諸名辞の定義から始まるホップズの第一哲学ないし論理学は、ハイデガーが論じたようにものの領域を排除して成立する代物ではなく、むしろ自然学での人間の身体を含めた諸物体の運動や感覚的経験を予め想定して初めて成立する学問なのである。「ホップズにとって科学ないし哲学は、諸名辞の定義とその結果としての命題の断定を通じて進んでいく。これは、ものの運動の経験に根拠づけられている。つまり人間が持つ諸概念は、世界のもの (res) を想定している。」(Bertman 1989, 112) そうしたホップズの唯物論の性格は、彼の唯名論の心髄である部分、すなわち過去の記憶を呼び起こすために物体の運動の知覚からしるし (mark) を作り、また人間相互の間で感覚的経験を伝達するために記号 (sign) を作るという、生身の人間相互で行われる実存的な相互交流にも見出すことができる。感覚的経験という諸原因から出発して諸名辞や科学的真理、法などを構成していこうと

するホッブズのこうした科学的立場は、彼の幾何学および政治学の論証の確実性として主張されるもので、バートマンによって構成主義と名付けられている<sup>11</sup>。名辞の起源を恣意(arbitrium)と考えるホッブズの記述に依拠しつつ、バートマンは命名行為における人間の恣意性を主張し、ホッブズの唯名論は、ハイデガーが論じたようなものの本質とは無関係であり、人間の恣意によって外的な事実存在を名指し、論証を構成しようという<sup>エピステモロジック</sup>認識論的な方法論に基づいて展開されたものなのであると考えた(DCo 16; 14; Bertman 1989, 114)。「事実存在とは、ホッブズにとって、感覚的経験の持続を理由に、人の心の中の概念の外部にある対象に推量によって言及している概念なのである。世界に対する人間の関係を組織する際に理性の持続的な行為の中に見出されるように、心の外部にあるものの事実存在を否定することは無意味である。」(Bertman 1989, 124)したがってバートマンにとってホッブズの繫辞の「である」とは事実存在に言及しうるものであり、論理的・存在論的な意味ではなく、心理学的・自然学的な意味において経験の領野に関わる事柄であると言えるのである(Bertman 1988, 137)。

こうしたバートマンによるハイデガー批判は、一方ではホッブズの繫辞の「である」の我々の理解に示唆的な視点を提供しているが、他方ではホッブズの唯名論に対するハイデガーの解釈に対して過剰に厳しく、誤解と思われる箇所も散見される。なぜなら、ハイデガーは、ホッブズの繫辞の「である」を真の命題を基礎づけるための一貫性のある哲学的根拠として言語の秩序の内部に閉じ込めることが目的ではなく、原初的な命名行為や諸命題の継起といった言説の諸契機においてもものすなわち事実存在に関与しており、本質存在に停留し続けられないというその限界を露呈一隠蔽しながらそれ自身の真理と明証性を主張していくというホッブズの唯名論の基本的特徴を明示することが目的だったからである。それゆえそれに対して肯定的評価を下すか、それとも否定的評価を下すかという違いこそあるが、ホッブズの唯名論の事実存在への関与の不可避性に対する事実確認のみについては、バートマンとハイデガーの両者には共通点が見出せるのである。

それではハイデガーやバートマンらの見解を参考にしながら、ホッブズの

<sup>11</sup> ホッブズによれば、直線や図形が人間自身の作図によって描かれる幾何学と、国家すなわちコモンウェルスが人間相互の信約によって設立される政治哲学とは、その論証可能性という点で類似性がある。それに対して自然的物体は、そのさまざまな結果や影響から我々が諸原因を推論しなければならないので、論証可能性が保証されていると言いはない。EW VII, 183-184.

第一哲学ないし形而上学の特異性や、彼の論理学と自然学における表象の構造および機能を可能な限り明晰に論述することも視野に入れつつ、ホッブズの存在の観念、すなわち繫辞の「である」を秩序づけることにしよう。本稿では便宜上、1. 名辞の分節 (articulation of names)、2. 繫辞による連結 (consequence by copula)、3. ものの指示 (designation of things)、4. 論証の識別 (differentiation between demonstrations) という四つの言語的観点からホッブズの存在の観念を考察することにする。

## 1 名辞の分節

アリストテレスにとって形而上学とは存在としての存在を第一に追究する学問であったが、もし繫辞の「である」という意味での存在を、諸名辞の連結という純粹に共時的な連鎖を基底で支える根本的記号として捉えるのならば、ホッブズにとって哲学とは、命題や三段論法という論証の継起の中で存在者の存在理由を探求する学問と言えるかもしれない (Aristotle 1957, 1003a21-32; CDM 1973, 105)。というのも、ホッブズの哲学の定義とは、「初めに我々がその原因や生成について持っている知識から真の推論によって獲得するような、結果や現れについての知識、そしてまた初めに我々がその結果について知っていることから獲得される原因や生成についての知識である」(DCo 3:2) と明言されており、原因から結果、ないし結果から原因へと人間がその軌跡をたどることができるような科学的因果関係の知識だからである。そしてその哲学的な遂行手段である推論 (ratiocination, ratiocinatio) は、諸名辞の加算と減算によって一般に行われる。例えば、「理性的な生命のある物体 (body-animat-ed-rational)」とも言い換えられる「人間 (human)」という名辞から「理性的 (rational)」という言葉が減らされるとしたら、「生命のある物体 (body-animat-ed)」すなわち「動物 (animal)」という名辞が残ることになるだろう。こうした理性による言葉の計算は、言葉の言説 (verbal discourse, discourse of the tongue) と端的に呼ばれる (EL 17-24; Lev 50, 51)。

しかし諸名辞の計算という推論による哲学的探求は、第一哲学 (first grounds of philosophy, philosophia prima) という題名の『物体論』第二部において物体と偶有性との諸関係が扱われているように、またバートマンが知覚の心理学という用語を用いて論証したように、自然学的な感覺的表象の理

論抜きには遂行することができない (DCo 91; 81; Bertman 1989)。というのも、確実な真理を一つの論証として提示すべき言葉の言説とは、我々が視覚、聴覚など諸感覚を通して経験した心の中のさまざまな感覚的表象、すなわち心の言説 (mental discourse, discourse of the mind) が言葉の言説へと転移 (transfer) ないし翻訳 (translation) されたものだからである (EL 13-17; Lev 51, 50)。心と言葉という二つの言説の間でものから概念へ、概念から言葉へと表象が二重化されているホッブズの表象的意味作用の体系は、ライエンホルストによれば、後期アリストテレス主義の形而上学の伝統を継承したものである (Leijenhorst 2002, 34-37)。後期アリストテレス主義は存在の普遍的な学問としての第一哲学と物体一般の普遍的な学問としての一般自然学とを区分し、第一哲学の中に自然学を融合させる傾向が見出されたのだが、ホッブズはさらに進んで第一哲学と一般自然学を同一視したのだった。それゆえ「言葉はものを意味するのか、それとも概念を意味するのか」という言葉と言葉が意味する対象との対応関係に関わる問題に関して言えば、ホッブズは言葉は概念すなわち感覚的表象を意味する記号であると考え、もの自体と言葉を直接結合するのではなく、ものが我々の内部に現れた感覚的表象と言葉を結合させたのである<sup>12</sup>。

こうした二つの言説の区分と表象の二重化を背景にして、ホッブズの名辞の観念およびそれらの分節の理論は展開されることになる。すなわち、ホッブズの名辞の定義とは、「以前に我々が持っていた思考と類似した思考を心に呼び起こしうるしとして、また他者に公言されるときには、他者にとって、以前に話し手が心に持っていた、あるいは持っていなかった思考の記号となりうるしとして役立つために、人間の恣意によって付与された語である。」(DCo 16; 14) 名辞が果たす機能には、過去に思い描いた思考を自分自身の心の中に再び想起させるしるし (mark, nota)、そして自分と同じ思考を他者の心の中に想起させる記号 (sign, signum) という二種類の機能があるが、そのどちらも、もの自体ではなくものの概念を心の中に想起させるという感覚的表象をさらに再一表象する機能を持つ (Lev 50, 51)。最終的にホッ

<sup>12</sup> ザルカは、存在と認識、対象と思考、そして存在理由 (ratio essendi) と認識理由 (ratio cognoscendi) という二つの項を同一視するアリストテレスの形而上学に対して、ホッブズはもの自体と人間の認識能力が算出したものとの明確な分離に基づいた形而上学を提唱したと考え、それを「分離の形而上学 (la métaphysique de la séparation)」と呼ぶ。Zarka 1990; 1998, 7-34; 1999, 12-23. 言わばホッブズは存在の秩序を論理学の唯名論的な秩序に置き換えたのであり、言葉の言説が諸科学を基礎づける根本部門として措定されている。Zarka 1999, 18.

ブズは数多くの名辞をそのカテゴリーの観点から1. 質料または物体の名辞、2. 偶有性または質の名辞、3. 幻像の名辞、4. 名辞の名辞という四つに分類しているが、このうち存在の観念に最も深く関与しているカテゴリーは第二の偶有性または質の名辞であろう (Lev 58-60, 59-61)。なぜなら、前記のハイデガーの記述が正しくも示したように、ホップズの具体名辞と抽象名辞の区別に関しては、具体名辞にその名辞が付与された理由をある特定の偶有性として示すのが抽象名辞であり、また抽象名辞は繫辞の「である」に由来するからである (Heidegger 1975, 265-266)。換言すれば、多様な諸名辞がこうしたカテゴリーに類型化されるべく命名され、区別されるのは、物体に具体名辞が付与される原因であるその偶有性を意味する抽象名辞が存在し、さらにまた抽象名辞が付与される原因として繫辞の「である」が存在するからなのである<sup>13</sup>。それゆえ諸名辞の分節が真に、かつ確実に保証されているかどうかを確認するためには、定理や定義といった普遍的な命題において諸名辞が繫辞の「である」によって正しく連結され、その意味内容の帰属が明晰に確定されていなければならない。

ホップズの第一哲学の研究では推論によって諸名辞の定義と計算を行う幾何学的理性にばかり注目されがちであるが、その基本要素としてのホップズの名辞の観念の分析は、諸名辞の統合 (syntagme) と連合 (association) のもとでいかに各名辞が同一性と差異の考察に基づいて分類されうるかといった論理的な観点からだけでなく、いかに存在者がその偶有性によって具体名辞として名づけられて学の対象となりうるか、またいかに人間の心の中の感覚的表象とそれを再一表象する名辞とが結合しうるかといった自然学的な観点からも行われる必要があるだろう<sup>14</sup>。というも、ホップズにとって第一哲学が扱うべき事柄とは単に諸名辞の定義と計算を行うことだけではなく、それによって存在者の名辞が付与される場所の自然的物体の原因や結果の論証も含まれるからである (CDM 105-106)。自然的物体とその運動による物理作用は、原初的なものの指示、すなわち命名作用の分析において我々は

<sup>13</sup> 抽象名辞と具体名辞との関係性については、Pécharman 1992, 49-59. ベシャルマンによれば、名辞の分節についてホップズは、二つの論理的問題を考察しなければならない。すなわち、1. 具体名辞を付与する理由とは何か、2. 新しい名辞をいかに形成するのか。ホップズは、前者については抽象名辞で示される偶有性によって、後者については抽象名辞からの派生によって解決しようとする。

<sup>14</sup> ここで統合とは、命題において諸名辞の連鎖が線形的に継起していく仕方、連合とは、それら諸名辞が同一性と差異の観点からさまざまなカテゴリーに帰属している仕方を意味している。統合関係と連合関係の記号論的な定義と解説については、Saussure 1967, 170-175.

遭遇することになる。

## 2 繫辞による連結

ホッブズの論理学における唯名論的な意味での存在の観念、つまり繫辞の「である」は、ホッブズの簡潔な記述とは裏腹に、主語と述語を連結して命題を形成する以上のいくつかの大きな意義を持っている。ここではハイデガーとバートマンの見解に賛同する仕方、その意義を1. 真理の形成、2. 命名の理由という二点にまとめて論じておくことにする。

第一に、繫辞の「である」は主語と述語を連結して一つの命題を作る記号であるが、命題が真であるためには、主語と述語は同一のものを意味するか、もしくは述語に主語が含まれていなければならない。つまり、「SはPである」という命題があるとしたら、 $S = P$ の関係か、もしくは $S \subset P$ の関係が成立していなければならない。この二つの条件のいずれかが満たされるとき、命題は真理 (truth) と呼ばれ、そうでないときは虚偽 (false) ないし背理 (absurdity) と呼ばれる (DCo 55-64; 49-57; EW 21-22; Lev 68, 69)。したがって日常生活の中で我々が誤謬 (error) をおかすことがあっても、それは経験から心の中で予測した出来事が起こったり起こらなかったりするという経験上の誤りから生じるのであり、真理の反対である虚偽や背理はあくまで命題の連結の不整合性に存する。虚偽や背理は、主に主語と述語を構成する二つの名辞が別の物事を意味している場合に発生し、物体の名辞を偶有性名辞に適用すること、物体の偶有性名辞を人間の身体の名辞に適用すること、などの言語上の誤りに起因する。こうした論証上の虚偽を避けつつ、人は、主語と述語双方の名辞にいかなる意味内容が適用されるべきか、またいかにそれらが等しい意味内容を持ち、また後者が前者に包摂されるべきか、といった命題的な帰属関係を真に決定しなければならない。

第二に、ハイデガーやバートマンも指摘したように、繫辞の「である」が主語と述語双方の名辞の命題的な帰属関係を決定するためには、繫辞は、具体名辞や抽象名辞を構成しているそれらの名辞が同じものに付与される理由 (causa) を我々に思考させなければならない。ハイデガーによれば、繫辞が我々にその思考を促すその理由とは、「ものの何であるかということ」すなわちものの本質 (essentia)、何性 (quidditas) であったが、彼は（そしておそらくホッブズも）、ものの本質や何性がいかなる過程を経て人間の感

覚によって知覚され、また彼の思惟によって定義されるかといった認識論的な問題について明確な解答を与えずに議論を終わらせてしまっている (Heidegger 1975, 263-266)<sup>15</sup>。だがその問題の解決に示唆的なホップズの記述を、感覚的経験に基づいたホップズの唯物論を擁護する文脈でバートマンが引用している (Bertman 1989, 115)。

しかし普遍的なもの (少なくとも、ある原因を持つもの) の原因は、それ自体で明らかであるか、あるいは (一般に人びとが言うように) 自然によって知られる。それゆえそれらにはいかなる方法も必要ない。それらは唯一の普遍的な原因しか持たず、それは運動 (motion, motus) だからである。なぜなら、多様なすべての形は、起こされている多様な運動から生じるからである。また運動は、運動以外の別の原因を持つとは考えられないからである。(DCo 69-70; 62)

つまり、ホップズにとって唯一の普遍的な原因は運動 (motion, motus) であり、繫辞の「である」は、命題の中に二つの名辞を連結することによって、その名辞が付与され、結合させられた原因である運動の思考へと我々を導く。では、この普遍的な原因であり、第一原理とも言える運動の定義とは何であろうか (藤原 2008, 65)<sup>16</sup>。「運動とは、一つの場所の連続的放棄と、別の場所の連続的獲得である。」(DCo 109; 97) スプレイジェンスやワトキンス、藤原など多くのホップズ研究者たちも強調したことであるが、慣性の法則という物理法則の影響を受けつつ幾何学的な作図法によって描かれるホップズの運動の観念は、アリストテレス的な有限な宇宙観から無限の宇宙観

<sup>15</sup> それゆえマーティニッチのような生粋のホップズ研究者ですら、ものの本質や何性の思考を我々に促すという繫辞の「である」の意義が何であったか推定できないほどである。「こうして「物体は可動的なものである」と言うことは、なぜ命名された対象が物体と呼ばれるのか、またなぜそれが可動的であると呼ばれるのかについて聴衆に考えさせることを意図している。これが正確に何を意味しているのか明らかではない。」(Martinich 1995, 241) だがものの諸名辞がその偶有性によって命名されていること、諸名辞の連結のためにはその本質に由来する定義を知らなければ不可能であることに鑑みれば、繫辞の「である」は言葉の言説に不可欠な根本条件であろう。

<sup>16</sup> 『物体論』第六章第四節では原理の発見について論じられており、普遍的な原因すなわちすべての物体ないし質料の原因は、分析的な方法によって獲得されるとされる。また次の第五節の内容に鑑みても、ホップズにとって普遍的な原因とは運動であり、第一原理であるように思われる。DCo 68-70; 61-62。なお『トマス・ホワイトの「世界論」批判』においてホップズは、原理 (principium) は原因 (causa) に置き換えられると述べている。CDM 312。

への転換という世界観の変革に基礎づけられており、科学的な原因の観念自体も大きく変貌させるものであった (Spragens 1973; Watkins 1973; 藤原 2008)。『形而上学』においてアリストテレスは、物事を認識する際に形而上学が扱うべき原因として四つのものを挙げていたが、それは、1. 物事の実体や本質である形相因、2. ものの質料である質料因、3. ものの運動を始める起動因、4. 行動がそのために始められるところの目的因であった (Aristotle 1957, 983a24-b1)。これに対しホッブズの第一哲学は、アリストテレスの四つの原因のうち形相因と目的因の二つを運動における起動因に還元しているので、結局我々が認識しうる原因として残されるのは、運動の原因であるところの起動因と起動者の影響を受けて変化する質料因の二つのみということになる (DCo 131-132; 117)。もしある物体に変化が生じ、何らかの結果が引き起こされるとしたら、つまり原因 (cause, causa) — 結果 (effect, effectus) という因果関係で表される事象が観察されるとしたら、起動因である起動者 (agent, agens) の偶有性と質料因である受動者 (patient, patiens) の偶有性という条件がすべてそろった場合であり、その過程で何らかの運動が存在したと我々は断言しうるのである (DCo 120-127; 106-112; CDM 314-316)。それゆえ、ものに名辞が付与された原因を思考するとは、人間が感覚によって知覚し、その理解によってものに名辞を付与するに至った外的なものの運動と偶有性を思考することである<sup>17</sup>。アリストテレス以来の伝統的な形而上学とは異なり、ホッブズの第一哲学には、唯名論的な秩序の枠内に貫徹することができず、命題の根本原理である繫辞の「である」の考察を通じて、諸名辞が付与される原因であるものの運動という自然学的な原理へと向かい、その上に他の諸学問を基礎づけようという姿勢を見出すことができるのである。

こうしてホッブズの哲学体系においてもものに諸名辞が付与される最大の根拠として運動の観念があらかじめ与えられているからこそ、カッシーラーが論じたように、分析的に結果から原因を、あるいは逆に総合的に原因から結果を求めるという仕方ですまざまな一般的諸規則が導き出されたときに、その発見者はそれらの規則が明晰かつ判明だと主張することができるのである (Cassirer 1999, 36-38)。しかし繫辞の「である」が、名辞が付与される理由としてもものの偶有性、つまり人間に知覚された運動を我々に想起させるとし

<sup>17</sup> 例えばソレルも、ホッブズは学問と命名、学問と正しい断定、そして学問と妥当性のある三段論法との結合関係を推敲したが、一方で運動は自然で起こる物事全てを説明すること、また他方で一般名辞はさまざまな種類の運動についての仮説と現象を結合することを可能にすると説明している。Sorell 1986, 27.

たら、その命名付与の原初的契機において、ものはいかにそのような本質、何性、偶有性を持つものとして命名者によって指示されうるのだろうか。

### 3 ものの指示

ホッブズの唯名論は外的なものに関与せざるをえないとハイデガーはそれを批判し、逆にまたそれは唯物論的な知覚の心理学に基づくとバートマンは擁護したが、両者の分析に欠けていた事柄があるとすれば、それはホッブズの存在の観念を中心にして言語とものとの関係性をより詳細に考察し、彼の論理学と自然学を結びつける接合点を明確にするという視点であったように思われる。ここではものの命名行為に焦点を当てて、繫辞の「である」と自然学的な意味での本質存在との接合点を探っていきたい。

ホッブズの唯名論において原初的な命名行為の現場に今まさに直面している人間は、外的なものの運動を感覚器官によって知覚しつつ、名辞が付与される理由をものの偶有性として理解していなければならない。というのも、例えば「物体 (body, corpus)」という普遍的な具体名辞は、「物体であること (to be a body, esse corpus)」や「物体性 (corporiety, corporeitas)」という普遍的な抽象名辞によって命名されなければならないが、そうした抽象名辞が意味するのは、我々人間が感覚器官によって受容したさまざまな物体の偶有性 (accident, accidentia) だからである (DCo 31-33; 28-29)。ここで偶有性とは「それによって物体が思い描かれる様態」(DCo 103; 91)であり、ホッブズの他の定義からすれば「物体の概念の様態」(DCo 104; 92)である<sup>18</sup>。そし

<sup>18</sup> ホッブズの偶有性の観念の意味内容について論じたものとしては、Leijenhorst 2002, 138-170; 川添 2000, 83-85, 173-174.

ライエンホルストは、ホッブズによるこの二つの偶有性の定義を、1. 現象論 (Phenomenalism)、2. 实在論 (realism) という二つの対照的な認識論の対立の問題として取り上げている。すなわち、第一に、「物体が我々の感覚に働きかける様態」という定義に鑑みれば、物体の偶有性は、我々の心に現れとして知覚された一つの主観的な現象にすぎない。だが第二に、「物体の概念の様態」という定義に鑑みれば、我々の知覚を超えた三次元の現実的空間に実在している物体の大きさと運動という確固とした偶有性は、あたかもそれがすべての人々に客観的で普遍的に妥当する概念であるかのように認識されとも考えうる。ライエンホルストは、色や匂いなど個々の物体にしか適用されない固有の偶有性 (accidentia propria) と、大きさや運動というすべての延長する物体に適用される共通の偶有性 (accidentia communia) という区別に基づき、ホッブズの二つの偶有性の定義を解釈している。現象論的な意味での偶有性は経験論で言われるところの第二性質であり、個々の物体にしか適用可能ではない。だが实在論的な意味での偶有性はあらゆる物体に共通して適用可能な第一性質であり、この实在論的な意味での偶有性を基礎にして現象学的な偶有性は理解されなければならない

て人間が、自分がある物体から受け取った偶有性をもとに物体に普遍名辞を付与するとき、物体は基体 (subject, subjectum) と呼ばれ、その物体の偶有性は本質 (essence, essentia) と呼ばれる。「ある一定の名辞をある物体に付けるところの偶有性、あるいはその基体を命名する偶有性は、一般にその本質と呼ばれる。」(DCo 117; 104) 例えば、「人間 (homo)」が「理性的動物 (animal rationale)」という名辞で呼ばれるのは、「理性的な動物であること (esse animal rationale)」が「人間の本質 (essentia hominis)」だからなのである (CDM 314)。

語源的に *essentia* は *esse* から派生した言葉であるが、ホッブズの本質存在の観念は、いかにして人間が個々の物体から運動を知覚し、その本質を理解し、ある特定の名辞を付与したのかといった命名の問題に答えるために、論理学と自然学を連結させる接合点である。つまり、主語と述語にある名辞が付与された原因を思考させる繋辞の「である」は、我々に物体の偶有性や本質だけでなく、それらを知覚させるに至った物体のさまざまな運動をも人間に考察させ、結果的に論理的な命題や論証をその自然学的な起源から基礎づけるという、唯名論の狭い枠組みを超えた役割を果たすのである。そうした役割は、人間の知識の端緒が、自然学で分析されるところの、外的物体から感覚器官を通じて受容した概念や想像といった感覚ないし感覚的表象であることから理解できるだろう (DCo 66; 59; EL 25-26)。繋辞の「である」は主語と述語が同一のものを意味する原因、つまり運動を我々に考察させるが、運動の観念を自然学的に解釈するならば、ホッブズにとってそれは感覚によって受容されたものの偶有性ないし本質を意味しており、さらには人間が心に抱く感覚ないし感覚的表象へとその意味が転移、翻訳されている。「それゆえ現れが、それによって我々がすべての他の物事を知る諸原理であるとしたら、我々は、感覚こそが、それによって我々がこれらの諸原理を知るところの原理であること、そして我々が持つすべての知識は感覚に由来することを認めなければならない。」(DCo 389; 316-317)

偶有性ないし本質による物体の命名行為に関して我々が注目すべきなのは、自然学的な意味における存在者 (*ens*) と存在 (*esse*) の区分である。ペシャルマンによれば、ホッブズは、プラトンやアリストテレスにおける存在者 (*τὸ ὄν*) と存在 (*τὸ εἶναι*) の区分を継承しつつ、存在者と物体、存在と偶有性を相

---

ない。Leijenhorst 2002, 155-163.

互に置き換え可能な仕方でも論じている (Pécharman 1992)<sup>19</sup>。それは、次のようなホッブズの記述によって明らかに理解できるだろう。

それゆえ人間の能力を超えるものを決定することも論じること哲学には決して許されないの、そして我々は想像できない存在者 (*entis*) を、また非物体的実体と呼ぶ習慣であるものを定義しようとならないので、我々は想像可能な存在者 (*ens imaginabile*) だけを定義する。したがってこの意味における存在者 (*ens*) は、空間を占めるすべてのもの、あるいは長さ、広さ、深さで測定できるすべてのものである。この定義から、存在者と物体 (*ens & corpus*) は同じであるように見える。(CDM 312)

その結果、存在 (*esse*) とは、物体自体が思い描かれる様態が決定され、区別されるところの物体の偶有性 (*accidens corporis*) に他ならない。(CDM 313)

まず存在者 (*ens*) の観念に関して言えば、存在者には、人間や動物、木のように心の中に何らかの像を思い描ける存在と、神や天使のように心の中にいかなる像も思い描けない存在との二つの種類がある (CDM 310-311)。しかし人間は心の中に想像可能なものしか哲学の対象として考察できないので、結果的に、現実空間を占めており、人間に知覚される物体のみが存在者だということになる。すなわち、ホッブズにおいて存在者とは、人間の感覚器官によって知覚されて基体となり、具体名辞で呼ばれるような外的な物体に他ならない。

それに対して存在 (*esse*) の観念についてホッブズは、文法学者は命題において主語と述語を結合する繫辞としての側面から存在を動詞であると考えがちであるが、存在は名詞でもあると述べる。というのも、「人間であることは、動物であることである (*Esse hominem est esse animal*) 」という命題が示すように、*esse* は「であること」として名詞を構成することもできるからである (CDM 312-313, 333-335; Zarka 1999, 113)。これは『物体論』第一部しか考慮しなかったハイデガーも、また他のホッブズ研究者たちも熱心に着目してこなかったことであるが、一方では、純粋に論理的な観点から繫辞

<sup>19</sup> ホッブズによるプラトンやアリストテレスの存在者 (*τὸ ὄν*) と存在 (*τὸ εἶναι*) の区別の言及については、CDM 313-314。

として主語と述語を連結する形式的役割しか果たさないと思われてきたこの動詞（しかも他の言語では必要ない場合もあると思われた）が、他方では名詞の役割をも果たするというこの言語機能的な両義性の意味を、我々はいかに考えるべきだろうか。ホッブズは、例えば「人間は動物である」という命題があるときに、読者がその命題の意味内容を正確に知るためには、「人間」と「動物」という名辞だけでなく、「人間であること」や「動物であること」の意味、すなわち各々の名辞が異なる名辞で分節化されて名づけられたその特定の意味まで追究する必要があると述べる（DCo 31; 28; CDM 313）。この事例から理解できるのは、その命題と諸名辞を観察すれば、さまざまな具体名辞に「であること（esse）」という名詞が単純に付け加えられることによって、それらの具体名辞はものの偶有性や本質の意味内容を含む抽象名辞に変貌しうること、すなわち「であること」は、ものの名辞に偶有性や本質を付加する記号、より明確に言えば、物体の偶有性それ自体を意味する記号となりうることである。

ここで「であること」としての存在の観念とは、我々が感覚器官によって知覚した物体の偶有性ないし本質を意味しており、それらは人間の身体の内外の運動を通じて、ある特定の感覚的表象として知覚されることになる<sup>20</sup>。というのも、ホッブズは、物体の偶有性ないし本質を意味する「であること」を、運動の諸契機において物体の偶有性の知覚・変化が引き起こされたところの物体の作用（actus, actio）と明確に言い換えているからである（CDM 314, 333-334）。では、なぜホッブズはそのように作用という語を用いたのだろうか。そもそもホッブズにとって運動の因果関係とは原因—結果という二つの項から構成されるもので、運動と変化を引き起こす能動者の偶有性とそれらが引き起こされる受動者の偶有性がすべて集合したときに、結果が引き起こされる。この原因—結果で示される運動の因果関係は過去に起こった出来事として運動を観察したときに使用される語であり、『物体論』におけるホッブズの記述によると、未来に起こる出来事として運動を観察したときには、原因と結果はそれぞれ力（power, potentia）と作用（act, actus）という語で置

<sup>20</sup> したがって「存在とは何か」を問うことは、ホッブズにとって、存在の原因かつ第一原理としての人間の身体の内外の運動を探求することである。運動の一元論者（monist）としてホッブズを解釈したスレイジェンスによれば、運動は外的物体によって空間の中で引き起こされるだけでなく、人間の身体内部の感覚・認識の過程の総体でもある。「ホッブズの観点によれば、諸情念が運動であるだけでなく、認識もまた、運動の一形式として考察されうる。すなわち、生物の感情的な努力と同様に知的権能も、根本的には運動に他ならない。」（Spragens 1973, 71）

き換えることができる (DCo 127-132; 113-117)。したがってホップズにとって作用による存在の置き換えは、存在が外的な物体から人間の心の中に思い描かれ、概念として感覚的に知覚される偶有性であることに鑑みれば、運動を引き起こす能動者の力によって変化させられ、またその変化が運動の結果として人間に知覚されるであろう受動者の偶有性を示唆している。このことは、物体の偶有性の形式を意味するところの様態 (modus) という語が、作用という語によって置き換えられていることから理解できる (CDM 334)。

主語と述語の両者が物体の名辞であるとき、述語を伴う繫辞は、その物体の存在ないし作用が表される名辞となる。例えば、「人間は動物である (Homo est animal)」という命題が真であるとき、「動物であること (esse animal)」は、人間の存在 (esse) ないし作用 (actus) と言われる。……したがってまた、次のような事実が生じる。すなわち、あるものがあれこれの様態「である (esse)」と言われる一方で、その「である (esse)」という語 (それはときどき本質と言われる) が名辞の数の中に受け入れられ、今述べている事柄、つまり、それにしたがって物体が思い描かれるところの様態 (modum secundum quem corpus facit se concipi) と一致するのである。(CDM 334)

存在は、命名する人間の心にももの本質として思い描かれ、諸名辞の作成を可能にする感覚的表象を意味するだけでなく、言葉の言説において諸名辞の命名から命題、三段論法、結論までの論証を可能にする繫辞の「である」として、心の言説の言葉の言説への転移や、言葉の言説における論証の継起を可能にする紐帯でもある。ペシャルマンが論じたように、存在という名辞には、我々が知覚した概念についての因果関係の思考と、その概念を意味する名辞の帰属についての因果関係の思考という二重の思考を我々に引き起こすような意味が内包されている (Pécharman 1992, 42)。何度も繰り返し述べたように、存在の観念は外的な物体に具体名辞が付与された原因を示すものであるが、そうした因果関係は、外的な物体から我々の概念へ、そして我々の概念から命名へという二段階の表象作用を経て考察されるべき事柄なのである。それゆえペシャルマンによれば、後者の命名の位相で基体と呼ばれた物体、そして物体の本質と呼ばれた偶有性は、前者の生成の位相ではそれぞれ質料 (matter, materia)、形相 (form, forma) と呼ばれることになり、他の

物体の運動によって引き起こされたある基体の偶有性の変化、つまりある質料の形相の変化が我々の脳に概念の変化として伝達されると、我々はその変化を運動の結果である作用—存在として知覚することになる (Pécharman 1992, 42-43)<sup>21</sup>。そして何らかの起動者の物体による運動の結果として、換言すれば、受動者の質料における形相の変化として受動者に引き起こされた作用は、例えば木製の「椅子」が壊されるとただの「木」になるように、その変化が生じた受動者の物体に対する命名の転換を我々に促すことになろう。

存在者と存在、物体と偶有性ないし本質の区別に基づき、初めて物体を命名しようとする人間は、自分が感覚器官によって受容した物体の偶有性ないし本質に依拠しつつ命名行為を遂行する。名辞とはもの自体を意味する記号ではなく、初めにその名辞を付与した人間が知覚した概念や思惟などの感覚的諸表象、すなわち心の言説の記号であり、主に過去の記憶を再び自分の心に呼び起こすしとしてか、あるいは言葉の言説によって自分の思考を他者に伝達する記号として用いられる。ホッブズによれば、初めに名辞を考案し、またアベルにそれらを教示したのは神であったが、バベルの塔で共通の言葉が忘却された後、世界中に散らばった国家・民族に属する人々が個々に恣意 (arbitrium) によって名辞を創造したので、現在存在するような言語の多様性が産まれたのである (DCo 16; 14; DH 89-90; Lev 48-50, 49-51)。

#### 4 論証の識別

運動の観念に基づいてものの偶有性や本質を理解したある特定の人物がさまざまな名辞を付与してきたのだとしても、彼の命名行為は他のすべての人々にとっても真で普遍的なものだと言えるだろうか。またその人物の命名行為が真で普遍的なものであったとしても、その諸名辞を継承した多くの人々によって定立された命題や論証は本当に真理であると言いつけるのだろうか。ハイデガーが述べたように、ホッブズの繫辞の「である」、あるいは存在者の存在が本質存在 (essentia) に等しいとしたら、真理の真理性はいかに決定されるのだろうか。というのも、ホッブズによれば、最初の誤った命名行為、経験での誤謬、論証での虚偽、誤った意見というように、言語のあらゆる領域に存在する多くの誤謬と虚偽、背理から、人々は唯一の普遍的な真理を恒

<sup>21</sup> ホッブズの形相や質料の観念については、DCo 117-118; 104-105.

久的な仕方では識別することができず、各々が自分自身の論証の真理を主張する百家争鳴の言論状況に陥ってしまうからである。名辞は真の名辞一つだけとはならず、論証は真の論証一つだけとはならない。ここでは繫辞の「である」の真理の真理性を保証する仕方について、ハイデガーとバートマンがそこまで深く論じなかった側面に焦点を当てることにする。

論理学において厳密な真理の観念を提示したホッブズの態度からは意外に思えることであるが、真理とは繫辞の「である」による主語と述語の正しい連結だけに存するのではない。ハイデガーやバートマンも指摘したように、ホッブズは、第一原理である運動を考慮に入れつつ、物体の偶有性ないし本質を正確に知覚し、物体に正しい名辞を恣意 (arbitrium) によって付与することが、そしてその名辞が他の人々によって真であると習慣的に受け入れられることが人類にとって最初の真理であったと述べる (DCo 36; 32; DH 89-90; EW 17-18; Heidegger 1975, 271-272; Bertman 1989, 114)。つまり原初的な命名行為において真理の真理性を決定するのは、繫辞の「である」による主語と述語の画一的で客観的な連結ではなく人間の企図的で主観的な恣意であって、そこではバートマンやピシア、セブコスキーが主張したような構成主義 (constructivism) の特徴が見出される (Bertman 1988; Pycior 1997; Sepkoski 2005)<sup>22</sup>。ホッブズの構成主義とは、外的物体からの運動から獲得した感覚や経験に基づく自然学は、その起源が人間自身にはないので根源的には論証不可能であるが、逆に幾何学や政治学、言語などは、人間自身の作図や契約、命名によって人為的に構成されたので真に論証可能であるという教説である (DH 92-94; EW 191-192)。例えばセブコスキーは、ホッブズの唯名論や数学は、人間の恣意によって作成された名辞や定義を一般大衆が習慣的に支持し続けた場合に真理として継承されるという構成主義的な特徴を持

<sup>22</sup> ある名辞や命題が、人間の恣意や慣習によって真理として決定・維持されていく歴史的状況を、ライエンホルストは、構成主義という語を用いずに規約主義 (conventionalism) と呼ぶ。真理に関わるこの規約主義は、カッシーラーによるホッブズの真理概念の批判や、古くは『省察』第三反論でのホッブズの唯名論に対するデカルトの苛立ちの中に見出すことができる。Cassirer 1999, 44-46; Descartes 1999, 608-609。

だがライエンホルストは、ホッブズの真理の観念を規約主義的に解釈することは限界があると述べる。なぜならば、名辞を付与する時点ではその命名行為に人間の恣意性は避けられないが、ある特定の普遍名辞が意味する我々の心の中の概念については、恣意性や慣習は排除されなければならないからである。つまり、能記である名辞に恣意性が含まれているとしても、所記である我々の概念はそうではないとライエンホルストは考えるのである。もちろんこれが、明証性や確実性の問題と深い関連性を持つことは言うまでもないだろう。Leijenhorst 2002, 43-44。

つと主張した (Sepkoski 2005, 44-47)。ホッブズ自身も、『省察』の第三反論において次のようにデカルトに反駁している。

もし推論が、「ある (est)」という語による諸名辞の結合と連鎖以外の何ものでもないとするならば、今や我々は何と言うべきでしょうか。そこから、次のような結果になるのです。すなわち、理性によって、ものの本性に関するすべてについてはまったく何も結論を出せませんが、ものの命名に関することだけはそうではないということです。つまり、理性によって、その意味を恣意的に (*à notre fantaisie*) 作ったところの習慣に従ってものの諸名辞を結合しているかどうかのみを、我々は考察することができるのです。(Descartes 1999, 608)

確かにホッブズにとって最初の知識の端緒ないし原理は運動によって伝達された感覚や経験であるが、知覚された感覚的表象に基づきある事物に構成主義的に普遍名辞が付与されるのは、物体の本質それ自体ではなく人間の恣意によってである。それゆえ、ある個人が自分の恣意によって名辞を付与することと、それが民族も言語も意見も異なる人々に真の名辞として習慣的に受容されることとはまったく別の問題となる (DCo 59; 66)。したがって、繫辞の「である」による主語と述語の正しい連結によって真の命題が構成されているかといった問題以外に、多様な意見と論証に分裂した言論状況の中で、自分が信じる真理の真理性をいかに他者に対して説得力を持って主張しうるか、またいかにそれを一つの習慣や真理として他者に伝達しうるかといった問題が生じるのである。ここでは、真理の明証性 (evidence) と確実性 (certainty) という二つの観点から、原初的な命名から派生したさまざまな命題、論証、意見の真理性を検証する仕方を論じることになろう。

ホッブズによれば、人間が獲得する知識には、感覚 (sense) と科学 (science) という二種類の知識が存在する。前者は主に自然学で論じられる領野であって、外的物体から人間への運動によって引き起こされた経験であり、さまざまな物事の結果の単純な総合から導かれ、歴史など事実の知識を構成する。後者は主に論理学で論じられる領野であって、命題の真理やものの命名、名辞の適切な使用に関して獲得された経験であり、分析的に発見された最初の原因から導かれ、諸名辞の連結についての知識を構成する (EL 24; Lev 98, 99; OH 92)。この二つの知識に含まれているのが真理と明証性 (evidence) で

あるのだが、後者の明証性とは、人間の概念がその概念を意味する語と一致することである（EL 25）。ここで概念と語の一致は心の言説と言葉の言説との一致、記号論的に言えば、所記（signifié）と能記（signifiant）との一致を意味している（Saussure 1967, 97-103）。能記である言葉がその意味内容を明確に持たないままただ習慣という理由で人々に用いられるとしたら、それはスコラ哲学の抽象的本質や実体的形相の観念のように、空虚で無意味な言葉になってしまうだろう。したがって、バートマンらが述べたようにホップズの唯名論が構成主義的であったとしても、心の言説と言葉の言説の記号論的一致とその転移が厳密に行われて正しい真理が流布されるように、人々の論証には真理の生命（the life of truth）としての明証性が存しなければならないのである（EL 25）。「そして明証性とは、推論の行為の中で人間の概念とその概念を意味する言葉が一致することである。というのも、人間が口だけで推論し、心がその話の始まりだけは示しても、口から出た語が心の概念を伴わないまま進み、そのように語っているという習慣からそうしているとしたら、彼が推論を真の命題から始め、完全な三段論法に進み、それによってつねに真の結論を形成するとしても、彼の結論は、概念と語の一致が欠けているがゆえに、彼にとって明証ではないのである。」（EL 25）

また真理の確実性（certainty）とは、他者に対してある真理を判明に教示できること、論証できることを言う。「科学の記号（signes）は、あるものは確実で誤りがないが、あるものは不確実である。あるものの科学を主張する人が、同じものを教えられるとき、すなわち、別の人にその真理を明解に論証しうるとき、それは確実である。」（Lev 76, 77）ホップズにとって科学とは、名辞の付与から主語と述語の結合による命題の作成、そして命題と命題の結合による三段論法の作成を経て結論へと至る言葉の言説の過程である。ではある個人が真理と主張している結論の命題は、繫辞の「である」によって結合された命題の中で主語と述語が同じものを指示している真理であり、またそれらの記号が心に抱く概念と一致するとしてその明証性が人々に慣習的に認められれば、確実で誤りがないと本当に言えるのだろうか。そうではない。現実には、命名や定義の不備や結論の普遍性の欠如により、ある結論はそれを主張している個人のただの意見（opinion）にすぎない事例が数多く生じてしまう。というのも、ホップズによれば、繫辞の「である」による主語と述語の正しい連結に基づいて構成された真で明証的な言葉の言説であっても、それは絶対的な知識ではなく、条件的な知識にとどまるからである。「そ

して私が以前に科学と呼んだ連結の知識については、それは絶対的ではなく、条件的 (Conditionall) である。いかなる人間も、言説によって、これないしあれがある、あった、あるいはあるだろうと知ること、つまり絶対的に知ることではできず、ただ、これがあるとしたらあれがある、これがあったとしたらあれがあった、これがあるだろうとしたらあれがあるだろうということ、つまり条件的に知ることしかできない。」(Lev 98, 99) 最終的に、繫辞の「である」から絶対的な真理を志向してきたホップズの唯名論は、この世界に数多くの真理と背理が競合しているという混迷の現状に抗おうとするが、いかなる意見や教説が確実で誤りがなく、また人々に明証な真理として教示されるべきかをアプリアリに決定することはできないのである。そうした真の教説の判定と識別という問題が解決されるためには、ザルカが述べたように、どの意見や教説が人々に教示されるべきかを最終的に決定する判定者としての、政治学における絶対的主権者の設立を待たなければならないだろう (Zarka 1999, 349)。

だが真の意見・教説をアプリアリに決定することが現実的に不可能であるとしても、このことは、ホップズの哲学体系が人類の英知すべてを否定するような懐疑主義に陥ることを意味しない。なぜなら、今まで論じてきたように、さまざまな真偽の命題や教説の出現を可能にする普遍的な原因ないし第一原理として、すべての諸学問と経験的事実の基底に運動—存在が実在することは確かだからである。もしある命題において繫辞の「である」による主語と述語の連結が誤りであり、諸命題の真偽を決定する判定者によって虚偽の命題と断定されたとしても、人々の心の中に諸概念を産出し、その誤った命題を構成させた原因として彼らの身体の内外に自然学的な運動が実在したことは事実なのである。存在の観念は、繫辞の「である」や基体の本質として諸名辞や真の命題を根源から規定する論理的な決定要因であるだけでなく、物体の偶有性や質料の形相として感覚的経験を我々に生じさせる自然学的な決定要因でもある。まさに存在の観念は、それら二つの領野の接合点として機能しつつ、真と偽、明証性と非明証性、確実性と不確実性を有する多様な意見が混在する言論の場そのものを人々に可能にする特権的な地位を占めているのである。

#### 四 おわりに

ホップズの存在の観念の意味内容を整序するという本稿の目的に沿う仕方で、ここまで論じてきた事柄を要約しよう。ハイデガーはホップズの存在観念を繫辞の「である」の形式で理解し、それは本質存在 (essentia) の地平で問題とされていると主張する。繫辞の「である」は主語と述語を連結して命題を形成する機能を持つのだが、そこで命題は、主語と述語が同じ内容を意味すること、あるいは主語の内容が述語の内容に含まれること、という二つの条件のうちどちらかを満たす場合に真理であると認められる。だが繫辞の「である」は命題の中で諸名辞を連結するだけでなく、ものに云々の名辞が付与された理由を我々に思考させる機能も持ち、そのときその理由はものの本質や何性であるとハイデガーは解釈する。

しかしハイデガーによれば、ホップズの繫辞の「である」に基づく唯名論的な秩序は、言語の構造の枠内で一貫性のある論理を構築することができない。なぜなら、原初的な命名行為において人間は、命名されたものに関与することを避けられないからである。だがハイデガーによるホップズの唯名論の弱点の指摘は、パートマンにとっては逆に唯物論との融合の堅固さとその真理の現実性を保証するものとなる。パートマンによれば、ホップズの哲学体系の基本的特徴として、人間がものから知覚した感覚的経験を出発点として名辞や命題、論証、法を構築していこうとする構成主義が存在するのであり、繫辞の「である」に基づくホップズの唯名論はものへの関与を避けて通ることはできないのである。

本稿では、名辞の分節、繫辞による連結、ものの指示、論証の識別という四つの観点から、ホップズの存在の観念と繫辞の「である」を取り巻く唯名論的な秩序について論じてきた。名辞の分節に関しては、ハイデガーによる具体名辞と抽象名辞の考察に基づき、ホップズの第一哲学には心の言説の言葉の言説への転移といった自然科学的要素が含有されており、諸名辞は物体から人間が知覚した偶有性によって分類されることを論じた。また繫辞による連結に関しては、第一に、繫辞の「である」を媒介とした主語と述語の正しい連結関係によって構築される真理の形態について整理した。第二に、繫辞の「である」は、主語と述語である諸名辞がものに付与される理由を示すものであり、それはハイデガーの説明と同じく、ものの本質あるいは何性であっ

た。だが本稿はより根源的にその理由を探求し、それを普遍的な原因や第一原理であるところの幾何学的な運動と位置づけ、ホッブズの第一哲学には自然学的な領野におけるものの運動の考察も含まれなければならないと論じた。第三に、ものの指示に関しては、人間がものを命名するためには、まず感覚器官によって受容したものの偶有性ないし本質を事前に知覚していなければならない。ホッブズは存在者と物体、存在と偶有性ないし本質を同一視したが、本稿は、存在という語は主語と述語を連結する繫辞としての機能だけでなく、ものの名辞に偶有性や本質を付加する記号としての機能もあるという見解を提示した。第四に、論証の識別に関しては、世界には真の論証だけでなく誤謬や虚偽、誤った意見が多数存在することに鑑みて、いかに複数の論証から一つの論証が真理として広く人々に支持されうるかを論じた。というのも、名辞の付与はそれを命名した人間の主観的な恣意によって決定されるのであって、諸名辞やそこから生成された命題や論証が客観的な真理として継承されるためには、繫辞の「である」による正しい諸名辞の連結だけでは不十分であり、人々の習慣という大きな原動力が必要とされるからである。そのように真理の真理性が不安定な状況でホッブズは、真理には、人間の概念とその概念を意味する語との一致、すなわち明証性が必要であると述べるのだが、それは他人にその真理を確実に教示しようという真理の確実性を実現するには至らず、自然哲学の領野内ではホッブズの知識は条件的な知識にとどまることになる。

本稿の最終的な結論として、ホッブズの存在の観念をあらためて整理しておこう。ホッブズにおいて存在の観念とは何よりもまず、1. 論理的観点からすれば、命題における主語と述語の正しい連結、すなわち真理を保証するところの繫辞の「である」である。2. 命題における連結の中で繫辞の「である」は、主語と述語が同じものを意味し、そのように連結される理由の考察へと我々を導く。3. 自然学的観点からすれば、繫辞の「である」が示唆する理由とはものの偶有性ないし本質、より根源的には運動を意味しており、存在は本質存在と同一視されうる。4. したがってホッブズにおいて存在者の存在とは、人間がものの本質として知覚し、より根源的には運動として理解するところの感覚的表象であること、またその感覚的表象の連続が名辞や命題、三段論法、論証の秩序に再一表象されたものが言葉の連結であり、繫辞の「である」に基づいてその真の連結が示されることである。

繫辞の「である」という語の研究がホッブズ研究者たちに軽視されてきた

原因の一つに、世界には繫辞の「である」を彼らの言語で使用しない国民が存在し、また必ずしも必要としないというホッブズの記述があるように思われる (DCo 31, 27-28; Lev 1078, 1079)。「世界のすべての他の国民が、それぞれの言語でそれ（「である」）に対応する語を持っているのかどうかについて、私は語ることはできない。だが彼らはそれ（「である」）が必要ないと確信している。というのも、もしそうすることが習慣であるのだとしたら（というのも、語に力を与えるのは習慣なので）、二つの名辞を順序よく並べることは、Is ないし Bee, Are などの語と同じように、それらの連結 (Consequence) を意味するのに役立つからである。」 (Lev 1078, 1079) しかし繫辞の「である」の語を使用しない国民は諸名辞の連続をその代わりに使用することで、名辞が付与された偶有性、本質、運動を予め思考した上で、真理や真の命題を構成すべくそのような諸名辞の連続的配列を行っているのであって、ホッブズにおいても世界中の諸言語においても、真理の記号 (a sign of truth) としての繫辞の「である」の特権的地位は揺るぎないものであり続けるだろう (Feldman 2006, 38)。

## 参考文献

ホッブズ (Thomas Hobbes) の著作からの引用については、以下のように略述した。『物体論』の翻訳はモルスワースの英語版およびラテン語版を参照して行い、英語版、ラテン語版の順で頁数を示している。また『リヴァイアサン』の翻訳は、英語頁、ラテン語頁の順で頁数を示している。

CDM 1973. *Critique du De Mundo de Thomas White*. Introduction, texte critique et notes par Jean Jacquot et Harold Whitmore Jones. Paris: Librairie Philosophique J. Vrin.

DCo 1839. *Elementorum Philosophiae Sectio Prima De Corpore*. In *Thomae Hobbes Malmesburiensis Opera Philosophica quae Latine scripsit Omnia*, in unum corpus nunc primum collecta, studio et labore Gulielmi Molesworth. Vol. 1. Londini: Apud Joannem Bohn.

1839. *Elements of Philosophy, The First Section, Concerning Body*. In *The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury, now first collected and*

- edited by Sir William Molesworth, Bart. Vol. 1. London: John Born.
- DH 1839. *Elementorum Philosophiae Sectio Secunda De Homine*. In *Thomae Hobbes Malmesburiensis Opera Philosophica quae Latine scripsit Omnia*, in unum corpus nunc primum collecta, studio et labore Gulielmi Molesworth. Vol. 2. Londini: Apud Joannem Bohn.
- EL 1969. *The Elements of Law Natural and Politic*. Edited with a preface and critical notes by Ferdinand Tönnies, second edition, with a new introduction by M. M. Goldsmith. London: Frank Cass & Co. Ltd.
- EW 1839-1845. *The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury*. Now first collected and edited by Sir William Molesworth, Bart. 11 vols. London: John Born.
- Lev 2012. *Leviathan*. Edited by Noel Malcolm. 3 vols. Oxford: Clarendon Press.
- 秋元ひろと . 2017. 「ホッブズの形而上学——彼の自然学のまえに置かれ、あとに完成される学問——」『三重大学教育学部研究紀要』第38巻、21-38頁。
- Aristotle. 1957. *Aristotelis Metaphysica*. Recognovit brevique adnotatione critica instruxit W. Jaeger. Oxford: Oxford University Press.
- . 1966. *Aristotelis Categoriae et Liber De Interpretatione*. Recognovit brevique adnotatione critica instruxit L. Minio-Paluello. Oxford: Oxford University Press.
- Bertman, Martin A. 1988. 'Semantics and Political Theory in Hobbes.' *Hobbes Studies* 1:134-143.
- . 1989. 'Heidegger on Hobbes.' *Hobbes Studies* 2:104-125.
- Brandt, Frithiof. 1928. *Thomas Hobbes' Mechanical Conception of Nature*. Copenhagen: Levin and Munksgaard.
- Cassirer, Ernst. 1999. *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit*. Text und Anmerkungen bearbeitet von Dagmar Vogel. In *Gesammelte Werke*. Band 3. Hamburg: Felix Meiner Verlag.
- Descartes, René. 1999. *Les Méditations*. In *Œuvres philosophiques de Descartes*, texts établis, présentés et annotés par Ferdinand Alquié. Tome II . Paris: Garnier.
- Feldman, Karen S. 2006. *Binding Words: Conscience and Rhetoric in Hobbes, Hegel, and Heidegger*. Evanston: Northwestern University Press.
- Foucault, Michel. 1966. *Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines*. Paris: Gallimard.

- 藤原保信. 2008.『ホッブズの政治哲学』佐藤正志・的射場敬一編、藤原保信著作集1、新評論。
- Heidegger, Martin. 1975. *Die Grundprobleme der Phänomenologie*. In *Gesamtausgabe*, herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Band 24. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann. (木田元監訳、平田裕之・迫田健一訳『現象学の根本問題』作品社、2010年)
- . 1977. *Sein und Zeit*. In *Gesamtausgabe*, herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Band 2. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- Kant, Immanuel. 1974. *Kritik der reinen Vernunft*. In *Werkausgabe*, herausgegeben von Wilhelm Weischedel. Band III, IV. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- 川添美央子. 2010.『ホッブズ 人為と自然——自由意志論争から政治思想へ』創文社。
- Leijenhorst, Cees. 2002. *The Mechanisation of Aristotelianism: The Late Aristotelian Setting of Thomas Hobbes' Natural Philosophy*. Leiden: Brill.
- Martinich, A. P. 1995. *A Hobbes Dictionary*. Oxford: Blackwell.
- Paganini, Gianni. 2007. 'Hobbes's Critique of the Doctrine of Essences and Its Sources.' In *The Cambridge Companion to Hobbes's Leviathan*, edited by Patricia Springborg. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 337-357.
- Pécharman, Martine. 1992. 'Le vocabulaire de l'être dans la philosophie première: ens, esse, essentia.' In *Hobbes et son vocabulaire: études de lexicographie philosophique*, sous la direction de Yves Charles Zarka. Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, pp. 31-59.
- Pettit, Philip. 2008. *Made with Words: Hobbes on Language, Mind, and Politics*. Princeton: Princeton University Press.
- Pycior, Helena Mary. 1997. *Symbols, Impossible Numbers and Geometric Entanglements: British Algebra through the Commentaries on Newton's Universal Arithmetick*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐藤正志. 1996.『政治思想のパラダイム——政治概念の持続と変容』新評論。
- Saussure, Ferdinand de. 1967. *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot.
- Sepkoski, David. 2005. 'Nominalism and constructivism in seventeenth-century mathematical philosophy.' *Historia Mathematica* 32: 33-59.
- Sorell, Tom. 1986. *Hobbes*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Spragens, Thomas A. 1973. *The Politics of Motion: The World of Thomas Hobbes*. With a Foreword by Antony Flew. Lexington: The University of Kentucky.

- Strauss, Leo. 1952. *The Political Philosophy of Hobbes: Its Basis and Its Genesis*.  
Translated from the German Manuscript by Elsa M. Sinclair. Chicago: The  
University of Chicago Press.
- 高野清弘. 1990. 『トマス・ホッブズの政治思想』御茶の水書房。
- Watkins, J. W. N. 1973. *Hobbes's System of Ideas*. London: Hutchinson Publishing. (田中浩・  
高野清弘訳『ホッブズ——その思想体系』未来社、1988年)
- Zarka, Yves Charles. 1990. 'L'enjeu de la philosophie première de Hobbes.' In *Thomas  
Hobbes: philosophie première, théorie de la science et politique*, publié sous  
la direction de Yves Charles Zarka avec Jean Bernhardt. Paris: Presses  
Universitaires de France, pp. 15-28.
- . 1995. *Hobbes et la pensée politique moderne*. Paris: Presses Universitaires de  
France.
- . 1997. 'Hobbes et la pensée politique moderne.' *Le débat* 96: 92-100.
- . 1998. *Philosophie et politique à l'âge classique*. Paris: Presses Universitaires de  
France.
- . 1999. *La décision métaphysique de Hobbes: conditions de la politique*. Deuxième  
édition augmentée. Paris: Librairie Philosophique J. Vrin.

